

Special Vision#6

introduction



動物たちに学ぶ！

みんな違って
みんないい
フレキシブルな子育て

2021年12月19日(日)

ただいま育児中「お猿の巻」 1997年1月REBORN

<http://www.web-reborn.com/ran/rebornikuzinikki/rebornikuzinikki2.htm>

REBORN ARCHIVES 1993~2011

ただいま 育児中 2回

お猿の巻



河合 蘭 絵・河合の息子

お猿さんを見ると、彼らの場合、子供が親にしがみつく。しかし人間の子は、自分で親にしがみつくことが出来ない。「しがみつきたいよ」と泣くだけで、親が「そうしてやろう」と思わない限り、横たわっているしかない。

動物園一番の人気者というのは、象でもライオンでもなく、猿山なんだそう。人間は、猿を見るのが好きだ。私は、特に親子ざるは、しげしげと見てしまう。いいなあ、あんな風に子供が勝手にしがみついてくれれば、楽だなあ。人間の母だって猿の母のように忙しいのだ。歩いたり、食事を調達したり、そればかりか人間は電話に出たり、宅急便に出たりするんだぞ。

動物園一番の人気者というのは、象でもライオンでもなく、猿山なんだそう
だ。人間は、猿を見るのが好きだ。私は、特に親子ざるは、しげしげと見てし
まう。いいなあ、あんな風に子供が勝手にしがみついてくれば、楽だなあ。
人間の母だって猿の母のように忙しいのだ。歩いたり、食事を調達したり、そ
ればかりか人間は電話に出たり、宅急便に出たりするんだぞ。

ともかく人間の母は、1年間は何とかかんとかして、子供を自分の手でくっ
つけなければならない。ここで人間は思い思いのやり方で子供をくっつける、
あるいはくっつけない、ということをやります。それは、民族、時代、流行な
ど「文化」とよばれるあらゆる要素でくるくると変わる。

で、私の”流儀”はといえば、できるだけお猿の親子にちかづくことをよしとし
ている。くっつくという単純なことが、人間も含めたすべての哺乳類親子の一
番大事な基本だと信じているから・・・後略

故・中川志郎さん(元・上野動物園、多摩動物園園長)
<http://www.web-reborn.com/interview/nakagawa.html>

REBORN ARCHIVES 1993 ~ 2011

中川志郎さん

小学校時代に飼育当番をした時、「うさぎに子どもが生まれているよ！」という声を聞いて小屋に駆けつけたら、子うさぎはどこにもいない。よく探したら、すのこの下に、子どもであったと思われる肉のかたまりが見つかった。

親子の本質には、何かとても本能的な、むき出しの野生が息づいている。しかし現在の子育て論には、本能としてこれをとらえる視点が脱落している気がしてならない。そんな状況の中で、「動物はこんなに子どもをかわいがる」を一気に読み(現在は絶版)、実に胸のすくような思いがした。中川志郎さんは上野動物園園長などを歴任された日本の動物園のリーダーであり、貴重な野生動物の繁殖にも関わってこられた。

インタビュー・文／ 河合 蘭

● 出産の条件は遺伝子に沈着している

河合 中川さんは生家が畜産農家でいらして、子どもの頃からうさぎを増やすのがお上手だったとか。

動物の、人間も動物ですが、そのお産や子育てがう



河合 中川さんは生家が畜産農家でいらして、子どもの頃からうさぎを増やすのがお上手だったとか。動物の、人間も動物ですが、そのお産や子育てがうまくいく条件というのは、何でしょうか。

中川 それは、「その動物が成立した過程で必要とされた条件がみたされない、母親は安心して子どもを産めない」ということです。どういうことかということ、動物というのはすべて、ひとつの種が成立するまでにものすごく長い時間がかかっていますね。

人間が動物を家畜化してから1万から1万5千年かかっていますが、その種が成立するためには何百万年、何千万年という時間がかかっている。人間も、ゴリラやチンパンジーと別れてから1万年経ったからといって、その性質が根本的に変わってしまうということは考えられないですよ。

だから、家畜化したうさぎも、動物の性質が変わってしまったと思うのは人間の錯覚であって、家畜になる前の元のところがわからないと、よく理解できない。

子どもを生む、育てるということは、自分が全く無防備になってしまふということなんです。

そうなる、うさぎは何百万年も「穴の中しか安全な場所はないよ」という情報を受け継いできたので、そのようなところにいたい、と強く思うわけです。

ところがケージのなかのうさぎは全く違った条件で生まなければならぬから、何回やっても子どもが死んでしまふとか、親が食べてしまふとか、そういう悲劇的なことが起こってくる。

そして、あのうさぎは悪いうさぎだ、たちがよくない、と言って片づけられがちなんだけれど、

本当は、うさぎが持っている地下生活者としての本能を全く無視した結果なんですよ。

河合 では、中川さんはどんな風になさったのですか。

中川 あのところ、うさぎはみんな、リンゴ箱で作った小屋で飼いました。前面に金網を張りましてね。

それで僕が子どもの時にやったのは、今言ったような理屈は知らなかったけれど、小屋の中を半分に仕切って、赤ちゃんを産む暗い部屋を作ったんです。

前面にもカーテンをつって四方がふさがれた空間を作った。

そうして、彼らが、かつて、最も安全でなければならないときに求めた環境に近いものが現出したわけです。

だから彼らは安心して子どもを生んだのです。

菊水健史先生(麻布大学獣医学部教授)

「妻が夫の子育てにイラつく」のが至極当然の訳

東洋経済オンライン 2020年4月4日公開

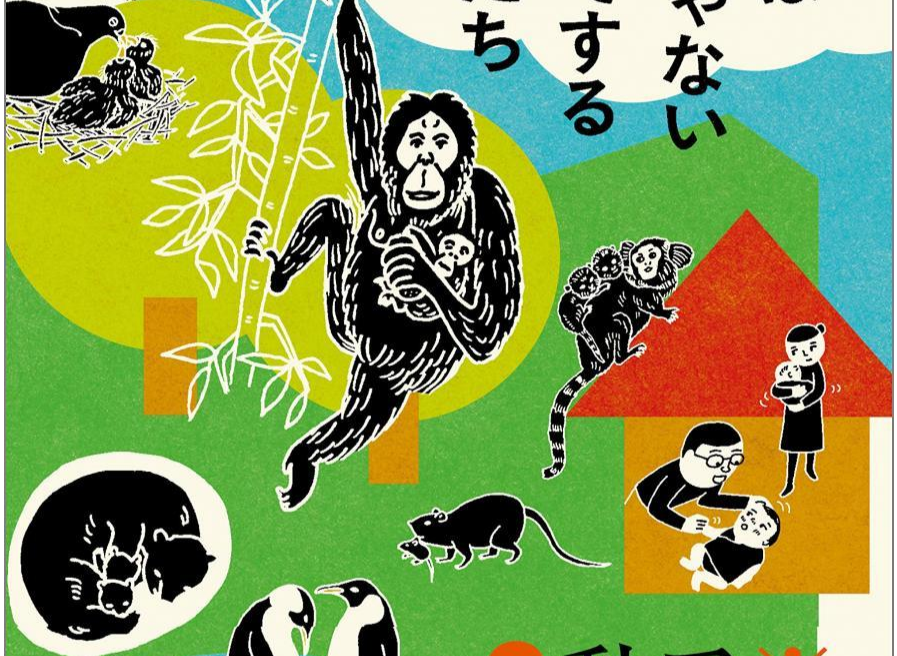
<https://toyokeizai.net/articles/-/340739>



「もっと育児をしてほしい！」という妻の期待にこたえきれず、責められている父親たち。しかし、母たちの本当にいらいだちは、共同保育ができないということ。

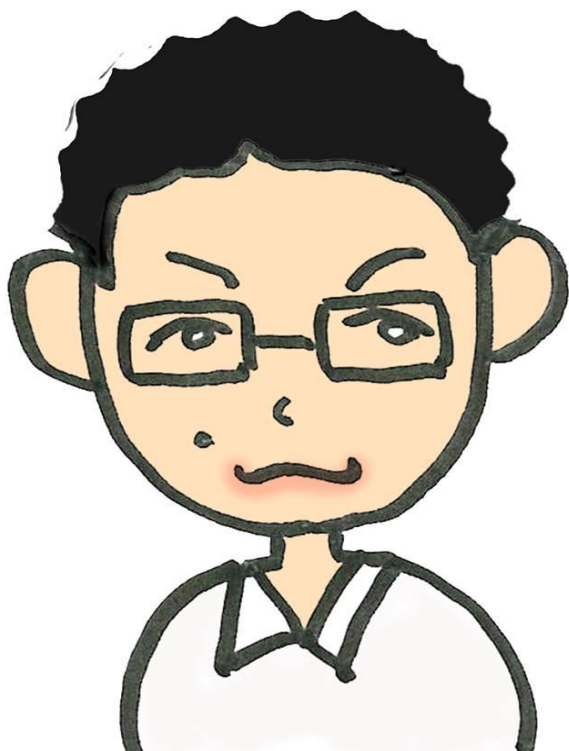
正解は
一つじゃない
子育てする
動物たち

齋藤慈子・
平石界・
久世濃子 編
長谷川眞理子 監修
東京大学出版会



※
その
アナタも
動物です
!

「進化」で
子育てをよみとく
新しい試み



平石 界 氏

慶應義塾大学文学部教授



久世 濃子 氏

(NPO法人日本オランウータン・リサーチセンター設立理事／一般社団法人海外環境協力センター研究員)



齋藤 慈子氏

上智大学 総合人間科学部心理学科 准教授